

アーレント、マルクス、ポピュリズム

百木 漢

はじめに

2016年はポピュリズムが世界を席卷した年であった。米国大統領選におけるドナルド・トランプの勝利、英国の国民投票におけるEU離脱の決定、フランス大統領におけるマリーヌ・ルペンの躍進などがそれを象徴している。拙稿(2017)では、英国のEU離脱決定や米国のドナルド・トランプ大統領誕生の大きな原動力となったのが、旧工業地帯や旧炭鉱地帯における「置き去りにされた left behind」人々の投票行動であったこと(水島 2016)、その背景には90年代以降のグローバル化の進展と産業構造の転換があり、それに伴う雇用の縮小、街の荒廃、治安の悪化などの状況があったことを紹介した(第一節)。米国のラストベルト(Rust Belt: さびついた地域)がその典型であったように、これらの地域では安価な労働力として移民が流入して来たり、海外から安価な製品が入って来たり、あるいは雇用が海外へ移転したりするなどの現象が生じたために、多くの労働者・住民たちはグローバル化による恩恵を感じる事ができず、逆にグローバル化に対する敵対心を懐くようになっていったのである¹。

移民が多く住む地域で、彼らと同じような生活条件にあり、同じような非安全に晒されている状況のなかで、どうにかして、彼らとの「違い」を通じて自分が「見捨てられた側」にいないことを示したい…。その際、そうした人々にとって心の拠り所になるのが、自分たちはこの国家の正統な国民であり、あいつらはそうではない、という意識である。そこに「国民」や「白人」といったアイデンティティが再び呼び出され、再活性化されるのである。すなわち、「排除の命法が力をもつのは、まさに、それじたい排除されかかっている地域において」である(萱野 2007、112-113頁)。そうした「排除されかかっている」「置き去りにされた」地域においては、「差別・排除はいけない。他者に対して寛容でなければならない」といった左翼的な(あるいはポリティカル・コレクトな)言説は意味を持たない。たとえ、「政治的に正しくない」としてもラディカルに現状を変え、かつての国家の栄光を取り戻してくれる強いリーダーを望む、という人々が増えてきているのである(第二節)。

さらにその背景には、冷戦体制の崩壊以降、左派(リベラル)に対する信頼感が低迷し、相対的に右派(保守)の人氣が向上しているという世界的状況があるように見受けられる。従来、グローバル化の展開を後押しし、そこに国民国家の役割縮小と国境を超えた世界市民の誕生を夢見てきた左派(リベラル)は、結果的に、多くの労働者にとって新自由主義的な経済のグローバル化を支持する存在に見えてしまい、それに対する反感が強まってしまっているのではないか(その典型がヒラリーである)。今日の新自由主義/グローバル資本主義の荒波に対して、「右」(保守)は国民国家/ナショナリズムこそがその荒波に対する防波堤になるという対抗策を示しうるいっぽうで、「左」(リベラル)の側はその荒波に対して、明快な対抗策を持ち合わせていないどころか、それを後押ししているかに見えてしまっているのである(第三節)。

¹ エマニュエル・トッドはトランプを選んだのは「虐げられたプロレタリア」だと述べている(「朝日新聞」2016年11月10日付インタビュー記事)。

本報告では、以上のような状況を踏まえたうえで、昨今のポピュリズムの現象とその発生メカニズムを思想史の観点から再考察することを試みる。多くの論者によって指摘されているように、ポピュリズムは決して最近になって生じてきた政治現象ではなく、近代民主主義に付随して、歴史上繰り返し生じてきたものであった（吉田 2011、ミュラー 2017）。そうであるとすれば、過去の思想家がポピュリズム的な政治現象をどのように捉えてきたのか、彼／彼女らがその発生構造をどのように考察してきたのかを振り返ってみることは決して無益ではないだろう。ここでは、ポピュリズム論においてもしばしば言及されるマルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』と、近年再び注目を集めているアーレントの『全体主義の起源』を取り上げて、それを昨今の政治状況と照らし合わせて、考察してみたい。

一、マルクスの「ルンペンプロレタリアート」

今日のポピュリズム現象を分析するにおいて、まず参照されるべき古典は、マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』であろう。この著作で描かれるのは、ナポレオンの甥であるということ以外に特別な才覚を持たない「凡庸」な人物であったルイ・ボナパルトが、王党派と共和派、ブルジョアジーとプロレタリア、といった対立をすり抜けて、第二共和政のもとで権力を掌握するに至った過程である。そのなかでマルクスが強調するのは、封建制の崩壊とともに誕生した「分割地農民」たちがボナパルトの強力な支持層になったということである。

ボナパルトは一つの階級を、しかもフランス社会で最も人数の多い階級、分割地農民を代表している。ブルボン家が大地所有の王朝であり、オルレアン家が貨幣の王朝であるのと同じように、ボナパルト家は農民の、すなわちフランスの人民大衆の王朝である。ブルジョア議会に服従していたボナパルトではなく、ブルジョア議会を追い払ったボナパルトこそ、農民が選出した人物なのである。（『ブリュメール 18 日』 176-177 頁、強調原文）

ここで分割地農民とは、封建的土地所有の解体によって、自らが所有する土地（分割地）と生産手段で農業を行うようになった独立自営農民のことを指す。こうした分割地農民たちは、マルクスが理論化した労働者階級とも資本家階級とも異なる独自の労働者層を形成し、男子普通選挙制の成立とともに無視できない政治的影響力を及ぼすようになっていた。彼らは自らが所有する財産（土地・生産手段）を没収されることへの警戒心から、革命の進行や社会主義勢力に対する強い反発心を持ち、保守的な傾向を示していた。しかし、彼らは明確な「階級」を形成していないために、自分たちの利害を議会や選挙を通じて主張することができず、「自らを代表することができず、代表されなければならない」²。その結果として、「ナポレオンという名の一人の

² 柄谷行人はここに、商品が自らの価値を自らで表現することができず、他の商品の使用価値によって表現されなければならないこと、そして最終的には貨幣（金）という権威を備えた一般的等価物によってあらゆる商品の価値が代表（表現）されるに至るというマルクスの価値形態論と同型の構造を見出している（柄谷行人「表象と反復」、平凡社ライブラリー版『ブリュメール 18 日』解説）。

男が自分たちにすべての栄光を再びもたらすという、フランス農民の奇跡信仰が生まれ」、本来彼らとは全く異なる階級に属するはずのボナパルトがその代表に選ばれ、「無制限の統治権力」として現れることになったという³。

彼らは、自分たちの階級利害を、議会を通してであれ、国民公会を通してであれ、自分自身の名前で主張することができない。彼らは自らを代表することができず、代表されなければならない。彼らの代表者は同時に彼らの主人として、彼らを支配する権威として現れなければならない。彼らを他の諸階級から保護し、彼らに上から雨と日の光を送り届ける、無限の統治権力として現れなければならない。したがって分割地農民の政治的影響力は、執行権力が議会を、国家が社会を、自らに従属させるということに、その最後の表現を見出した。(『ブリュメール18日』178頁)

マルクス主義的な階級理論からすれば、労働者階級でも資本家階級でもない分割地農民は、その理論からこぼれ落ちてしまう「余計な」存在であり、いずれ歴史のなかで消えゆく封建制の残滓として捉えられるほかない。分割地農民は資本の原始的蓄積の暴力（労働者と生産手段の切り離し）に晒されていないがゆえに、労働者階級（プロレタリアート）となる要件を満たしておらず、革命の主体にはなりえない。むしろ、階級闘争を後退・遅延させる復古的な勢力であり、時代錯誤的な権威主義になびいてしまう存在であるとマルクスの目には映っていた（とはいえ、そのような分割地農民の存在を理論の外部に切り捨てるのではなく、彼らが及ぼす政治的影響力を鋭く分析してみせたところにマルクスの天才ぶりがあるのだが）。

しかも、分割地農民は「強力な政府と強力な租税」に捕捉され、「遍在する無数の官僚制」の普及を促進し、近代国家権力を支える基礎を作り出す。それは「国土の地表全体にわたって、諸関係と諸人格の均一な水準を創出する。したがってそれは、一つの最高の中心点からこの均一な大衆のすべての地点に向かう均一な感化作用を可能にする。それは、人民大衆と国家権力との間の貴族的中間段階を根絶する」（184頁、強調引用者）。封建領主による人格的支配から解放されたいっぽうで、分割地農民たちは「貴族的中間段階」を介さずに国家権力による支配に直接的に捕捉されることになる。ここから生み出される「均一な感化作用」こそが、ポピュリスティックなボナパルティズムを成立させる土壌となったのだと考えられる。

分割地農民は膨大な大衆を形成しており、その成員はみな同じ生活状況にあるが、相互にさまざまな関係を結ぶことがない。彼らの生産様式は、彼らを相互に交流させる代わりに、互い

³ 以下の記述を参照。「議会的共和制の崩壊がプロレタリア革命の勝利の芽をそのなかに含んでいるとしても、その間近の具体的な結果は、議会に対するボナパルトの勝利、立法権力に対する執行権力の勝利、決まり文句の権力に対する文句抜き暴力の勝利であった。古い国家の一つの権力が、こうしてさしあたりただその制限から解放され、無制限の絶対的な権力になったにすぎない」（『ブリュメール18日』173頁、強調原文）。

に孤立させる。この劣悪なフランスの交通手段と農民の貧しさによって助長される。彼らの生産の場、分割地は、耕作にあたって分業や科学の応用の余地がなく、したがって発展の多様性、才能の差異、社会的諸関係の豊かさの余地もない。個々の農民家族はみな、ほとんど自給自足し、その消費物の大部分を直接自ら生産し、こうしてその生活資料を、社会との交流よりも、むしろ自然との粗暴な交換で獲得する。（『ブリュメール 18 日』 177 頁）

封建制の崩壊後に誕生した分割地農民たちは「膨大な大衆」を形成しているが、伝統的な共同体の結びつきと近代的な社会の結びつきの双方を欠いており、バラバラに孤立している。また彼らの耕作には、近代科学や近代的生産を活かす余地がなく、「発展の多様性、才能の差異、社会的諸関係の豊かさの余地」がない。こうした記述にはあからさまに分割地農民に対するマルクスの不信感と軽蔑心が表されているが、このような社会的関係と発展性の欠如が、本来、彼らを代表する立場にあるはずがないボナパルトを、彼らに「再び栄光をもたらす」権威的存在として担ぎ上げることに繋がったのだとマルクスは分析する。

マルクスはさらに、こうした分割地農民に「フランスに属する 400 万人（子供等々を含む）の公認の窮民、浮浪者、犯罪者、売春婦に、500 万人の生存の破滅の淵に漂い動き、農村そのものに住むか、あるいはぼろをまと子供を連れて農村から都市へ、都市から農村へとたえず逃げまわる人々」、すなわち「ルンペンプロレタリアート」を付け加えて考察しなければならぬと主張する。ルンペンプロレタリアートとは資本主義社会の最底辺に位置する浮浪的な貧民層のことを指し、労働者（プロレタリアート）のなかでも「墮落したもの、零落したもの、労働能力のないもの」（『資本論』S.673）を指す。言いかえれば、ルンペンプロレタリアートは無産労働者階級のなかでも労働と革命への意欲を失った「信用ならない」「反革命の温床になる」存在である（『共産党宣言』）⁴。その存在をマルクスは以下のように記述している。

いかがわしい生計手段をもつ、いかがわしい素性の落ちぶれた貴族の放蕩児と並んで、身を持ち崩した冒険家的なブルジョアジーの息子と並んで、浮浪者、除隊した兵隊、出獄した懲役囚、脱走したガレー船奴隷、詐欺師、ペテン師、ラッツァローニ、すり、手品師、賭博師、ポン引き、売春宿経営者、荷物運搬人、日雇労働者、手回しオルガン弾き、くず屋、刃物研ぎ師、^{いか} 鋳掛け屋、乞食、要するにはっきりしない、混乱した、放り出された大衆、つまりフランス人がボエーム〔ボヘミアン〕と呼ぶ大衆がいた。（『ブリュメール 18 日』 104 頁）

当時、急速に資本主義化と都市化、工業化が進展するなかで、ヨーロッパの各都市にはこうした怪しげな人々・貧困な浮浪民が大量に出現して社会問題となっていた。そしてルイ・ボナパルトは、分割地農民にあわせて、こうした都市に滞留するルンペンプロレタリアートの代表をも率

⁴ 「ルンペンプロレタリア階級、旧社会の最下層から出て来る消極的なこの腐敗物は、プロレタリア革命によって時には運動に投げ込まれるが、その全生活状態から見れば、反動的策謀に喜んで買収されがちである」（『共産党宣言』 53 頁）。

先して自認していたとマルクスは指摘する⁵。すなわち、ボナパルトは、「ルンペンプロレタリアートの首領となり、自分が個人的に追求している利益を…大衆的形態で再発見し、あらゆる階級のこのようなくず、ごみ、残り物のうちに自分が無条件で頼ることのできる唯一の階級を認識した政治家であった⁶ (104-105 頁)。

境界線をぼやけさせる新しい布告が出る。ボナパルトは、同時にブルジョアジーに対抗して農民と人民一般の代表を自認し、市民社会の内部で下層人民階級を喜ばせようとする。「真の社会主義」から前もってその統治の知恵をだましとる新しい布告が出る。しかし、ボナパルトは何よりも12月10日会の首領を、ルンペンプロレタリアートの代表を自認しており、そして彼自身も、彼の周囲の者たち、彼の政府、彼の軍隊もこれに属しているのであって、ルンペンプロレタリアートにとって何よりも重要なのは、自らに慈善を施し、カリフォルニアの当たりくじを国庫から引き出すことなのである。(『ブリュメール18日』190頁)

こうして郊外・地方における分割地農民と都市におけるルンペンプロレタリアートこそが、男子普通選挙が認められた第二共和政(1848年)のもとで、ルイ・ボナパルトを大統領に押し上げ、1851年のクーデタと独裁体制の実現を可能なものにしてしまったのである。こうして社会のなかで安定的な立場を持たない人々(社会のなかで「余計者」とされる人々)が、自分たちの声を代表・代弁する存在を、既存の政党・政治家に見出せないために、その反動として、自分たちとは正反対の階級に属する俗物的な人物を熱狂的に支持してしまうという現象は、今日のポピュリズムにおいて生じているのとほとんど同型の構図ではあるまいか。

二、アーレントの「モップ」

もうひとつ、「あらゆる階級の屑、ゴミ、残り物」とマルクスが表現した、このルンペンプロレタリアートに関する記述から想起されるのが、アーレントが「モップ mob」と呼んだ人々の存在である。「モップ」とは19世紀の階級社会からはみ出した人々であり、商人・山師・やくざ者・ごろつきなどを含んだ「全階級、全階層からの脱落者の集まり」(『全体主義の起源』第二部、55頁)であった。階級社会からも国民国家からもはみ出した「余計者」であったこれらのモップたちが、帝国主義的膨張の尖兵役を担い、一獲千金を求めてアフリカ大陸へ乗り込んでいくことになったことをアーレントは論じている。

興味深いことに、アーレントもまたモップを「社会の余計者」および「社会の廃棄物」と呼び表し、次のように述べている。「彼らは市民社会が窮屈すぎると言って自分から飛び出したので

⁵ こうしたいかがわしい群衆がボナパルトを支持するに至った(あるいはボナパルトがこれらの群衆を支持層として活用するに至った)社会的・歴史的背景については、横張(1999)を参照。

⁶ 分割地農民およびルンペンプロレタリアートが「自らを代表することができず、代表されなければならない」ことの反面として、ボナパルトはそのような「代表されない人々を代表する」ことによってしか、政治的な存在として現れることができない。「ボナパルトは、すべての階級の家父長的な恩人として現れたがっている。しかし彼は、他の階級から取ってこなければ、どの階級にも与えることができない」(『ブリュメール18日』192頁)。

はなく、市民社会から吐き捨てられたのである。彼らはこの社会の文字通りの廃棄物（refuse, Auswurf）だった」（111頁）。帝国主義論の古典、ホブソン『帝国主義』が明快に理論づけたように、帝国主義とは国内に「余剰」を抱えた先進諸国が軍事力を背景にして国外に植民地を獲得し、その「余剰」を植民地へ排出した膨張運動であったが、アーレントが強調したのは、資本だけでなく人間（労働力）もまた「余剰＝余計（superfluous, überflüssig）」なものとなり、「排出」と「廃棄」の対象となっていたということである。

資本主義の発展のもうひとつの副産物として、余った富よりもっと古くから生まれていたものがあつた。人間の廃物（debris, menschliche Abfallprodukte）がそれである。彼らは、工業拡大の時期のあとを必ず襲った恐慌ごとに生産者の列から引き離され、永久的失業状態に陥れられてきた。無為を強いられたこれらの人々は過剰資本の所有者と同じく社会にとって余計な存在だった。（『全体主義の起源』第二部、47頁、強調引用者）

当時すでに完全に明白だったにもかかわらず歴史家が気づかなかつたことは、モップは社会の屑（refuse, Abfall）であるばかりでなく社会が直接生み出した産物であり、それゆえに社会から決して完全には切り離せないということであつた。（55頁、強調引用者）。

こうしたならず者・ごろつき・余計者としての「モップ」たちが、南アフリカをはじめとする植民地において、人種主義 racism を用いた支配体制を作りあげたことをアーレントは論じている。そもそも人種主義が帝国主義支配に取り入れられたのは、イギリスによる南アフリカのケープ植民地支配においてであり、そのルーツはもともとその地に住み着いていたオランダ系移民・ブーア人の存在にまで遡ると彼女は分析する。17世紀中頃に南アフリカに入植し、長きにわたってその地を支配していたブーア人は、原住民を支配するにあたって「人種」や「肌の色」を根拠とする人種主義支配の方法を発明した。そして19世紀後半に南アフリカへ乗り込んできた帝国主義者たちによってこの方法が発見・再活用され、人種主義を用いた植民地支配体制が確立されていくことになったという。「彼ら〔帝国主義者たち〕は、自国の国民を人種集団に変えることによって他の「人種」を支配しうるのなら、ブーア人を喜んで真似ようと考えた」（136頁）。

このような人種主義支配の方法は、その後、ブーメラン効果によってヨーロッパへ逆輸入され、東中欧諸国における「大陸帝国主義」に引き継がれる。後発国であるがゆえに植民地獲得競争に乗り遅れた東中欧諸国は、ヨーロッパ近隣諸国に膨張先を求めざるをえなかったが、その際にその膨張運動の原動力となったのが「汎民族運動」および「種族的ナショナリズム」であつた。国民国家の形成に首尾よく成功した西欧諸国に比べて、歴史的・地政学的経緯からして国民国家の形成に出遅れた東中欧諸国は、「国民性」形成の基礎となる「土地との結びつき」を欠いていたがゆえに、同一の「血」や「魂」を共有する「民族」や「種族」という観念に頼るほかなく、そ

こから汎民族運動や種族的ナショナリズムが生まれたとアーレントは分析する⁷。これらの運動は、しばしば自民族が常に「敵の世界に取り囲まれて」、「一人で全部を敵とする」状態に置かれているという観念を伴い、「一定の具体的目標というよりはむしろ一種の政治的気分、そして似通ったメンタリティー」によって結びつけられていた（こうした記述は否応なしにわれわれに現代の「ネット右翼」の姿を想起させる）。

このような汎民族運動・種族的ナショナリズムと結びついた大陸帝国主義においても、「最初からモップが主導権を握って」（168頁）おり、「海外帝国主義の場合のような植民地での経験を経ることなしに最初から人種主義の方向をとり、19世紀が伝えた人種世界観をはるかに熱狂的にまた意識的にわがものとした」（164頁）。すなわち、海外帝国主義ではモップが植民地支配の手段として人種主義を導入したのに対し、大陸帝国主義ではモップが人種主義それ自体を膨張運動の目的として扱い、それを「余剰＝余計なもの」の捌け口にしたのである。

あらゆる階級から集まった社会の廃棄物に対して海外帝国主義は現実には脱出先を見つけてくれたが、汎民族運動のほうはイデオロギーと運動のほかには何も提供できるものがなかった。（『全体主義の起源』第二部、166頁、強調引用者）

こうして、社会の「廃棄物」「余計者」たるモップたちが先導するかたちで、海外帝国主義から大陸帝国主義、さらに大陸帝国主義から全体主義へと引き継がれる人種主義イデオロギーと、それに基づく支配体制が築かれていったという道筋を、われわれは『全体主義の起源』第二部から第三部の流れにおいて見出すことができる。そこに示されているのは、社会の「余計者」たるモップが、自分たちとは異なる集団を人種主義によって別種の「余計者」に仕立て上げる政治運動・支配体制を生み出していき、最終的に「人間を余計者にするシステム」としての全体主義へと至る回路を作っていたという構図である。

三、モップと反ユダヤ主義

また見逃されやすいところだが、アーレントは『全体主義の起源』第一部「反ユダヤ主義」のなかでも「モップ」の存在に触れ、ドレフュス事件の際にモップが反ユダヤ主義の積極的な支持層となったことを指摘している。「モップが憎むもののすべてがユダヤ人のうちに体现されていることは明らかだった」。ここではモップは「ありとあらゆる階級脱落者^{デクラッセ}からなる」「主として零

⁷ 以下の記述を参照。「彼らは『国家』と国民意識に対立するものとして、歴史、言語、居住地とはかわりなく同一民族の血をひくすべての人間を包括すべき『拡大された種族意識』を持ちだしたのである」（『全体主義の起源』第二部、164頁）。汎民族運動・種族的ナショナリズムは、「伝統、政治的諸制度、文化など、自民族の目に見える存在に属する一切のものを基本的にこの『血』という虚構の基準に照らして測り、断罪する」（170頁）。この「拡大された種族意識」は、国民国家の地理的限界を踏み越えた、つねに膨張する「民族共同体」の実現を夢見るようになるが、実際にはそのような政治単位は過去にも現在にも実現されることがない以上、その目標は未来に見出されるほかない。それゆえ「種族的ナショナリズムは最初から現実には存在しない架空の観念を抛りどころとし、それを過去の事実によって立証する試みさえ全くせず、その代わりにそれを将来において実現しようと呼びかけるのである」（170頁）。

落した中産階級から成っていた」と説明されたうえで、「モップは自分たちを締め出した社会と、自分が代表されていない議会を憎ん」でいたことが指摘される（『全体主義の起源』第一部、204 頁）。それゆえモップの活動は議会外の群集行動というかたちをとり、軍部のなかにまでユダヤ人が入り込んでいたと騒ぎ立て、ドレフュスの処刑を大声で要求した。

「ユダヤ人を殺せ！」との呼び声はありとあらゆる都市に響き渡った。リヨン、レンヌ、ナント、トゥール、ボルドー、レクルモン＝フェラン、マルセーユ——いたるところで反ユダヤ主義の声明が発せられ、その中央指導部は全然秘せられていなかった。人民の怒りはありとあらゆるところで同日同時刻に爆発した。グランの指導のもとにモップは軍隊的に組織された。反ユダヤ主義の突撃隊は街頭を支配し、ドレフュス派のすべての集会を本物の戦闘で終わらせた。（『全体主義の起源』第一部、210 頁）

ここで確認しておくべきは、アーレントが 1884 年から 1914 年と名指した帝国主義の時代は同時に反ユダヤ主義が大きな高まりを見せた時代でもあったということである⁸。実際に、第一部のクライマックスを飾るドレフュス事件が起きたのは、まさに帝国主義の時代真っ最中の 1894 年のことであった。アーレントはこの時期に国民国家と階級社会という「19 世紀的秩序」に揺らぎが生じ、それが 20 世紀における全体主義の出現を準備することに繋がったと見ており、その兆候（リハーサル）がドレフュス事件における反ユダヤ主義の高まりであったというのである。

こうして海外・大陸帝国主義だけでなく、反ユダヤ主義においても、「零落した中産階級」「階級脱落者」たるモップたちが人種差別主義に染まりやすく、過激な排外行動に出やすい傾向を持っていたことが指摘される。さらにモップはユダヤ人のみならず、フリーメイソンやイエズス会のような団体に対しても、陰謀論的な想像を膨らませ、それらを強く攻撃していたことをアーレントは指摘しているが、モップがこうした社会における特殊な立ち位置の人々を攻撃対象にしたのは、モップ自身が社会から「締め出され」、社会のうちに安定的な立場を確保できない「根なし草」的存在であったからだと考えられる。それに対する不満・不安・怒りなどの感情は、社会の主流派（ブルジョアジー）に向けられるよりも、むしろより弱い立場にいる人々に対して向けられやすい。近年のポピュリズムにおいて、排外的な極右政党を強く支持したのが、「置き去りにされつつある」旧工業・旧炭鉱地帯における労働者層であったことから想起されるように、階級脱落者たちは自分たちが社会から「締め出され」ていることへの不満・不安・怒りから、自分たちと類似した境遇にある、社会に溶け込めていない人々を差別的・陰謀論的な言動で排斥し、それによって、自分たちがそうした人々よりも社会的に上位の立場にいることを威嚇的に示そ

⁸ 『全体主義の起源』は一見、第一部「反ユダヤ主義」→第二部「帝国主義」→第三部「全体主義」という風に時系列的に全体主義へと至る歴史的系譜が語られているかのように見えるが、実際には第一部と第二部はほとんど同時期に展開しているものであり、反ユダヤ主義と帝国主義という諸要素（elements）が全体主義へ結晶化（crystalize）していったのだと捉えられなければならない（牧野 2015）。

うとしたのだと考えられる。その際に、人種・肌の色・国民性などの要素が排斥・差別の道具として持ち出されるのであり、ここに社会のはみ出し者（余計者）たるモップたちが人種差別主義に染まりやすい理由があると言えよう。

さらにアーレントはモップの傾向として次のような点も指摘している。

モップはあらゆる暴動の際に自分たちを指導しうる強力な人間のあとについていくのである。モップは選ぶことができない。喝采するか投石するしかできないのだ。だからモップの指導者たちは、近代の独裁者たちがそれによって素晴らしい成果をあげたあの人民投票による共和政を投じすでに求めた。モップは自分を締め出した社会と、自分が代表されていない議会を憎んだ。第三共和政の社会と政治家は、短期間に相次いで起こるスキャンダルや詐欺事件のうちにフランスのモップを作り出してしまったのである。（『全体主義の起源』第一部、204頁）

マルクスのルンペンプロレタリアートや分割地農民と同じく、モップたちも社会の主流からはみ出している（締め出されている）ために、通常の議会や選挙（代表制民主主義）において自分たちの声を代表してくれるものを見つけ出すことができない。そのために彼らは、議会外の群集行動に走るか、自分たちを導いてくれる強力な人間を熱狂的に指導するかしかできない。すなわち「喝采するか投石するかしかできない」⁹。彼らの言動が常識的なモラルやマナーを踏みにじった非人道的なものに見えるのは、そもそも彼らが常識的な社会のルートからはみ出し、あるいは締め出されている（と彼らが感じている）からである。彼らが強い指導者に求めるのは、モラルやマナーに則った行儀の良い（ポリティカル・コレクトな）政治ではなく、たとえモラルやマナーを破ったとしても、「われわれ」（友）と「あいつら」（敵）の間に明確な境界線を引き、同一的なわれわれ（＝国民）を演出してくれることである¹⁰。

結語

近年、新自由主義的な経済のグローバル化の展開とともに、格差の拡大・雇用の流動化（不安定化）・地域コミュニティの衰退などの現象が生じ、それとともに中間層から没落する「置き去り」にされた／されつつある労働者がますます増加していることが報じられている。本報告の議論を踏まえるならば、こうした労働者たちを「あらゆる階級・階層からの脱落者」として見、マ

⁹ こうした「喝采と投石」という表現、さらにそれとセットになった「近代の独裁者たちがそれによって素晴らしい成果をあげたあの人民投票による共和政」という記述はシュミットの独裁論をわれわれに想起させる。これらの記述にシュミットに直接的な参照はないが、『全体主義の起源』の他の箇所でもシュミットへの言及があることから鑑みても、アーレントがシュミットの政治理論を読んだうえで、こうした記述を行い、そこに独自の「モップ」という概念を付け加えて分析しようとした可能性は高い。

¹⁰ またアーレントは、モップの特徴を示す要素として彼らの没倫理的あるいは反倫理的な性格を挙げている。モップは近代市民社会のうちに偽善の匂いをかぎつけ、その偽善をかなぐり捨てたニヒリスティックな欲求をむき出し、近代市民社会をつかさどる倫理や道徳をあざ笑う。それゆえ、モップは「偽善をかなぐり捨てたブルジョワジー」の姿であり、それが当時のブルジョワジーや知識階級に予想外に受け入れられたのだという（『全体主義の起源』第二部、56頁）。こうしたモップの没倫理的・反倫理的な言動は、今日の差別主義者たちが示す「反知性主義的」な態度と重なるものではないか。

ルクスが論じた「ルンペンプロレタリアート」やアーレントが論じた「モップ」と重ね合わせて分析する視座が開かれるだろう。もちろん、実際にはこれらの人々の属性や置かれた状況には様々な差異があり、より詳細な検討が必要となることは間違いない。ここで示したのは、あくまで近年のポピュリズム現象に対する思想的考察を深めていくためのごく大まかなアウトラインにすぎない。

しかし、社会から「置き去り」にされ「見捨てられ」つつあると感じる人々——とりわけ社会の変動期において中間層から脱落した／しつつある労働者たち——が、自分たちを見捨てた社会と自分たちの声を代表してくれない議会（既存の政党・政治家）あるいはマスメディアに対する怒りと不満から、本来、彼／彼女らとは全く異なる立場にあるはずの俗物的あるいは権威的な指導者を担ぎ上げるいっぽうで、自分たちよりも弱い立場にある人々を差別的・人種主義的な言説を用いて排撃しやすいという傾向、そしてそのような群集行動が徐々に全体主義へと至る道筋を準備していくという大きな構図を、これらの事例からひとまず取り出しておくことができるのではないか。このような事態は、民主主義制度のうちで、これまでも繰り返し生じてきたし、今後も不可避免的に生じてくるものだと予想される。そのような「喝采と投石」に走る人々を非難し、あるいは嘲笑するのは簡単なことだが、それだけでは問題の本質はいつまでたっても解決しないのではないか。それよりも重要なのは、そのような「置き去り」にされた人々を生み出してしまう社会構造を歴史的・思想的に分析することであろう。その際にマルクスやアーレントが残してくれた考察は、われわれに重要な道標を提供してくれるはずである。

参考文献

- アーレント、ハンナ、『全体主義の起原』新装版 1-3、大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、1981年。
- 萱野稔人、「ポピュリズムのヨーロッパ」、『権力の読み方——状況と理論』、青土社、107-148頁、2007年。
- 牧野雅彦、『精読 アーレント『全体主義の起原』』、講談社選書メチエ、2015年。
- マルクス、カール、『共産党宣言』、大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波文庫、1951年。
- 、『資本論』第1巻、岡崎次郎訳、国民文庫版、第3分冊、大月書店、1972年。
- 、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』、植村邦彦訳、平凡社ライブラリー、2008年。
- 水島治郎、『ポピュリズムとは何か——民主主義の敵か、改革の希望か』、中公新書、2016年。
- ミュラー、ヤン＝ヴェルナー、『ポピュリズムとは何か』、板橋拓己訳、岩波書店、2017年。
- 百木漠、「ポピュリズム、「右」の躍進と「左」の苦境」、『唯物論研究年誌』、22号、153-166頁、2017年。
- 横張誠、『芸術と策謀のバリ——ナポレオン三世時代の怪しい男たち』、講談社選書メチエ、1999年。
- 吉田徹、『ポピュリズムを考える——民主主義への再入門』、NHKブックス、2011年。